

茨木孝雄
元国立天文台天文情報センター広報普及員

研究種目 : 基盤研究 (A)

研究課題名 : 天文学との連携にもとづく考古学・古代史学研究法の構築

本研究成果報告書は、上記研究課題の一要素となる下記の研究課題に関する研究成果報告書である。

本研究課題名 : 古来よりの日本人の星の信仰・思想の考察

1. 研究の背景

本研究課題を受託された茨木は、1977年7月7日以来、東京都杉並区立科学教育センターでの講演会事業『天文の夕べ』において七夕と十五夜の講演会の企画と講師を、40年近く担当した経験をもつ。

七夕と十五夜は、星と月の観賞を謳った日本の民俗行事としても注目され、様々な芸術文化・商業活動を伴いながら各地で継承され続けている。しかし、科学文化施設やプラネタリウムなどでの活動に限ると、たとえば世界天文年を機に日本天文学会が実施している全国同時七夕講演会に見るように、天文習俗の話題は天文学普及活動の前座でしかない印象が拭いきれない。星月もまた、太陽と同じように古来より文化の深層に関わる重要な要素なのではないだろうかと考える私は、本研究課題に示された内容に関する調査研究を続けてきたのであった。

その成果の一端は、国際プラネタリウム協会年会（1996）での講演『星の図像学、あるいは日本における天文習俗の概要 Stellar Iconology and Astronomical Folklore in Japan』で示された。

また、世界天文年2009を機に結成された〈アジアの星プロジェクト〉の一員として、『アジアの星物語』（海部宣男 監修）の執筆にも係わらせていただいた。ただし同書は、アジア諸国の天体にまつわる神話伝説伝承の集成本であったため、当然ながら日本に関する部分はごく僅かしか採り上げられていない。

そこで、日本の制作者たち（通称・和星チーム）は引き続き星の和名や日月星に関する伝承、天文学の歴史に関わる史跡などを網羅した本邦初となる集大成書の完成を目指して、研究と編集の会合を定期的に行ってきた。私の担当が天体の信仰に関する分野であったため、本基盤研究の一部となる上記課題を担当せよとの依頼を受けた次第である。

古代史学や考古学は、書籍や建造物、道具類など様々な遺品を通して人類文化の歩みを理解しようとする学問だが、研究に際して天文現象への理解が必要な場合や、そもそも天象との関連という視点が無かったための誤解が、往々にしてあった。また近代以降、天体の信仰に関する研究は宗教史の一分野として存在していたものの、研究者も少なく盛んとは言いがたい。

もちろん、文化財関連のニュースや博物館展示、書籍出版の状況などをみても、古代史や社寺への大衆の関心は時にブームとなる程に高く、考古学上の発見もまた注目度が高い。

では、星や宇宙分野はどうだろうか？国立天文台をはじめとする関連諸施設や業界によるアウトリーチの功もあり、活況を呈しているのだが、天文学と考古学の両分野が有機的に結びついて話題と

なった例は、高松塚古墳やキトラ古墳の星宿壁画の例などを除き極めて少ない。いっぽうで、古代人の信仰が天文現象と結びつきやすいのは明らかであり、天文現象と宗教文化との関わりをもう一度見直す作業は、十分に今日的意義があるものとする。

2. 研究の目的

多くの創世神話には、天体を神格化し当該天体の特徴を属性として持つ神が登場する。中国とその影響下にあった我が国も例外ではない。日本人を含め多くの民族にとって天体神と言えば、まず太陽神と月神であろう。とりわけ日本の太陽神アマテラスに関する研究や著作は枚挙にいとまない。較べて月神ツクヨミの研究が少ないのが気になりとはいえ、本報告書での天体神は星神の意味とし、日月神は、次年度以降に取り上げる予定の三光信仰と関連して取り上げる予定である。星の信仰を考えると、まず思い浮かぶのは、夜空の星を仰ぎ見て、手を合わせて祈る人びとの姿ではないだろうか？ 絵画や映像で表される星形にはロマン主義的イメージがつきまとうけれど、古くは、いわゆるベツレヘムの星伝説が好例で、キリスト教徒にとっての十字架は、光芒を伴った星のかたちなのである。日本の星辰信仰聖地の一つ、能勢妙見山の家紋“切竹矢筈十字”が、偶然にも八芒星十字形なのは興味深く、星と宗教との結びつきを象徴しているように思えてならない。

そのような天体神を祀る社寺の成立と変遷を文献学的に調査した上で、可能な限り現況を実地踏査することによって、日本人の星辰信仰の特質が明らかになるものと考えた。

これまで、宗教学や宗教民俗学の立場から明星（多くは金星を意味する）との関連が深い虚空蔵寺や、北極星および北斗七星に関連づけられた妙見信仰の社寺が調査・研究されてきた。

しかしながら、信仰の対象となる天体の出没、運行を地上の一地点から見たときの複雑さから、社寺の立地やそこで行われた祭祀や仏事（会）の天体との関連を指摘するのは難しく、過去の研究が寺社の成立と変遷、仏教や陰陽道、神道の教義や歴史文献の調査など、神仏の天体としての属性は問わない分野での研究が大半を占めているのが現状である。

本研究では、先行する宗教学的調査から多くを学び、その資料を尊重しつつも、現代より遙かに身近に、かつ素朴に天文現象を観ていたと思われる古代人の立場を見据えて、天文民俗学・天文考古学的な調査分析と考察の枠組みを構築したいと考えた。

また、単年度のみでは到底不可能で、今後、妙見宮や虚空蔵寺と落星伝説や過去の隕石落下地、および日本の主要な鉱山地帯との関連を調査して、星辰信仰と金属文化との関連を探る新たな視点から“日本人が天空に向けた想念としての星辰信仰”の姿を明らかにしたいと思っている。

3. 研究の方法

本研究課題へのアプローチとして、民俗学や考古学あるいは地質学などフィールドワークを必須とする研究分野で通常行われている研究手法を採った。すなわち (3-a) 研究課題の設定に伴う関連文献の調査、及び問題点の抽出、(3-b) 実地調査とその結果想起された新たな疑問点の考察。研究の手法は (3-a) から (3-b)、再設定された (3-a) への循環となる。しかし、初年度の仕事としては (3-a) のみ、あるいは予備的な実地調査にとどまり、これらは従来の天文民俗学・天文考古学的な分析と考察の枠組みの中で行われた。調査結果を再検討し、認知天文学的なテーマ仮説を想



〔能勢妙見山東京別院〕

(墨田区本所)

定できるフィールドと判断できるなら、次年度の再調査項目の一つとして検討したい。

(3-a) 文献資料の調査と問題点の抽出

日本人の星の信仰（本研究課題名）について、その歴史や特徴を解説した上で著者独自の分析内容を記述した書籍を挙げる。この分野に興味を持つ一般読者はもちろん、専門研究者にとっても読み応えある書籍が、以下の3冊（いずれも絶版）しかない状況が寂しい。しかし、いずれも再版が望まれる好著である。

* 『星の宗教』吉田光邦 著 1970 (淡交社)

全260pp. の内、日本関係は76pp. にすぎないが、土御門神道 名田庄村の記録、八代妙見宮、河内・観心寺、山科・妙見寺、星田・妙見寺など、60年代の貴重な取材記録が取められている。(京大宇宙物理学出身で科学技術史専攻。のち人文科学研究所 所長)

* 『星占い星祭り』金指正三 著 1974 (青蛙房)

全310pp.の前半140pp.は日本人と星との関わりを文学・歴史・宗教の観点から通観し、後半部で北辰、北斗に関わる妙見信仰を概説した。日本の星の信仰に関心をもつ一般読書人や専門家に向けた初の成書。氏が29歳（1943）のときに上梓した書「我が國に於ける星の信仰」もある。

* 『星の信仰 妙見・虚空蔵』佐野賢治 編 1994 (発行・溪水社 発売・北辰堂)

全511pp. 編者の佐野賢治氏には『虚空蔵信仰』(雄山閣出版 1991)、『虚空蔵菩薩信仰の研究』(吉川弘文館 1996)の研究向け大著があるが、本書は、編者ほか20名の著者による日本の星神信仰の研究解説書。副題の妙見信仰と虚空蔵信仰に関する歴史や地域別特徴、航海民の信仰、星由来の昔話や民話など豊富な分野を取める。

以上のように、この分野は専門的解説書が極めて少ない点に加え、“星信仰”をキーワードに検索すれば明らかなように、「オリオンミステリー」に代表される似非科学書（トンデモ本）が多いのもまた気になるところだ。

* 『消された星信仰～縄文文化と古代文明の流れ』榎本出雲・近江雅和 共著 1996 (彩流社)

トンデモ本的なタイトルが気になるものの、星信仰の発生を言語学的に考察した上で、関東地方の星信仰社寺の調査や“アラハバキ”と呼ばれる隠された神に関する論考を加えた研究書。通論的な記載がないため番外の一書とする。全281pp. 上記3書と同じく絶版のため、図書館や古書店等で手にとるしかない。

なお、個々の信仰やその関連テーマを採り上げた単行本、研究論文や雑誌寄稿記事を集めた特集雑誌、科研費補助金研究成果として発表された著作物等は、必要に応じて適宜引用したい。

日本人の星辰信仰に関する書籍を通読した印象をあえて述べるならば、「我々日本人は天体としての星を、ほんとうに信仰の対象にしていたのだろうか？」… そもその疑問が拭い切れない点であった。

天空に認識される対象物として、恒星と惑星、太陽と月の4種類の光体は、色や明るさ、大きさや位置、あるいはそれらの変動等が光体によって異なるため、認知の仕方にも差異がある。したがって、その影響は信仰心という精神作用の違いに反映されるに違いない。自然信仰の発生を解き明かすためには、認知科学的アプローチが必要不可欠となるのだ。

(3-b) 実地調査とその結果から想起される新たな疑問点の考察

私が本科研費研究に参加する以前から、継続して取り組んでいた研究テーマの代表が「妙見信仰の調査研究」であった。本務の科学教育事業の合間に行うために、調査地が近いことは何よりの利点で、そのような例として秩父神社（埼玉県秩父市）の祭礼を挙げる――

京都・祇園祭、飛騨高山祭とならぶ日本三大曳山祭の一つとして知られる秩父夜祭は、秩父神社の例大祭である。その起源や祭礼行事について民俗学の立場から数多くの研究がなされてきた。単なる参拝客ではなく年中行事

への参加や見学が可能なら、ここが秩父の人びとの暮らしに密接に関わる場所だと実感するに違いない。

4月の水分（みくまり）神事で、八大龍王を祀る今宮神社から授与された水幣（みずぬさ）が秩父神社に運ばれて、同日に秩父神社で行われる御田植祭に用いられる。この水



[藁の龍神と白色の水幣（秩父神社）]

幣を鳥居の前に設置された藁の龍神に刺す行為によって、境内の敷石が一面水田になると仮想され、田植神事が始まる。

そして12月の夜祭の日、笠鉦・神輿の行列に加わった龍神を象る藁が御旅所に供奉される。龍神は武甲山の神であり、春には再び秩父の里へ下りてくるのだ。

水分と田植の神事は丸一日がかり、夜祭は翌日の明け方まで続く神事で、とりわけ12月の寒さは厳しく、秩父神社に帰還した妙見神を迎える未明の神事の参観者は、地元民でさえ数えるほどだった。（調査時には、私が神殿を退出した最後の一人だった。）

近年“冬の七夕”のキャッチフレーズで紹介されるなど、観光人気が高まる夜祭だが、おそらく山岳信仰と妙見信仰とが複合した祭礼だからであろうか？秩父神社の妙見女神と武甲山の男神、御旅所に奉納されている亀の子石との関係が不明確な点など、調査するほどに謎は尽きない。

さらに、後述する秩父妙見の成立史を考えると、群馬県高崎近郊の花園村から秩父地方にもたらされた妙見菩薩を最初に祀った場所は何処なのか、その変遷の痕跡と言われる“妙見七つ井戸”伝承との関連を明らかにすることも今後の課題の一つである。なお、社寺の本殿や本堂の正面方向は地勢や太陽方位で決めるのが一般的で、秩父神社や当初遷座したと推定される寺院が、背後に北極星、南に武甲山を望む方向に建立されている点からも、妙見信仰と山岳宗教との融合の一例と見做されるだろう。



[例大祭（夜祭）で御旅所に向かう藁蛇]



[御旅所に鎮座する亀の子石]

4. 研究の成果

(4-a) 妙見信仰の伝来と発展

妙見信仰の発祥地は古代中央アジアの砂漠地帯と言われている。(西アジア起源説もある) 灼熱の昼間を避け夜間の移動を常とした遊牧民にとって、方角を示してくれる北極星は神のような存在だったに違いない。自然崇拝としての北極星(北辰)信仰は隣国の漢に伝わり、北辰は道教や陰陽道の最高神・鎮宅靈符尊と同一視され、さらには仏教と習合し妙見菩薩となった。こうして、北極星とその周囲を巡る北斗七星の両者を象徴する北辰妙見大菩薩が誕生したのである。(妙見と天体との対応という点では、北斗七星6番目ミザールの輔星アルコルを妙見とする説もある。)日本への伝来は、明確な資料がなく推定でしかないが、資料(下表)(G)大阪・河内の妙見寺の名が777年の文献に認められる⁽¹⁾。また、『日本霊異記』には、毎年妙見菩薩に燈明を献じていた寺が畿内にあったこと、海難事故に遭遇したが妙見菩薩の功德で唯一人だけ助かったとか、盗まれたものが戻ってきたなど、妙見菩薩絡みの3話が収められている。同書はほぼ時代順に記載されていて、盗まれた絹の衣が戻ってきたというもっとも古い話が聖武天皇の神亀年間(724-729)である点からも、八世紀中葉を妙見信仰が庶民に流布した時期と捉えてよいと思われる⁽²⁾⁽³⁾。

八代妙見(A)(熊本)由来譚は、681年、妙見神が百済あるいは中国本土から亀蛇に乗って竹原津(現・八代市竹原町)を訪れたと語り⁽⁴⁾、大内妙見(B)&(C)(山口)の由来譚⁽⁵⁾が語るのは、それより1世紀近く前、推古天皇の御世に今の下松市の辺りが青柳浦と呼ばれていた頃の出来事だ。松の大木に星が降り、七日七晩輝き続けたため、巫女のお告げによって星の神を祭ったという。八代と下松、どちらにも史実的根拠はなく後付けの由来譚に過ぎないが、この二つの地域が渡来人たちの信仰の拠点となり、さらに時の為政者の政策的な支持も手伝い妙見信仰が流布していったのである。

	現在の名称	所在地	祭神/本尊
A	八代神社(妙見宮)	熊本県八代市	天之御中主神 國常立尊
B	氷上山興隆寺	山口県山口市	北辰妙見尊星王
C	妙見宮驚頭寺	山口県下松市	妙見菩薩
D	但馬妙見日光院	兵庫県養父市	妙見大菩薩
E	小松神社(星田妙見宮)	大阪府交野市	住吉三神 息長帯姫命
F	能勢妙見山	大阪府豊能郡能勢町	北辰妙見大菩薩
G	天白山妙見寺	大阪府南河内郡太子町	北辰妙見大菩薩
H	岡崎宮妙見堂跡地	三重県伊勢市	妙見大菩薩->よみうりランド妙見堂に鎮座
I	千葉神社	千葉県千葉市	北辰妙見尊星王(天之御中主神)
J	法性寺妙見堂	東京都墨田区	開運北辰妙見大菩薩
K	秩父神社	埼玉県秩父市	天之御中主神ほか
L	三鈷山妙見寺および妙見社	群馬県高崎市	釈迦如来
M	相馬中村神社	福島県相馬市	天之御中主神
N	相馬小高神社	福島県南相馬市	天之御中主神
O	相馬太田神社	福島県南相馬市	天之御中主神

[伝搬地毎の主たる妙見信仰社寺]

(今日、下松市や交野市など星とその信仰をキーワードに市の活性化や観光化を図る地方都市もあるが、その功罪は本報告書の趣旨と異なるため、述べない。)

妙見信仰の拡散もまた急速に進行し、八世紀の頃、東国各地には既に妙見菩薩を祀る寺院が存在していたと思われる。河内の妙見寺と関係があったと伝えられる上野国花園村(群馬県高崎市)の妙見寺(七星山息災寺)もそのような古刹の一つだった⁽⁶⁾。



[妙見社(左)と妙見寺(右)(高崎市引間町)]

当時、関東各地には国府が置かれていたが、朝廷から国司として派遣された源氏や平家姓の貴族たちは、しだいに財力と武力を蓄え豪族として各地に根付いていった。そのような状況下に平氏の内乱として勃発したのが平将門による承平の乱（931）であり、その中で正史への記載はないが、将門が叔父の平良文（後の千葉家の祖）と組んで、伯父の平国香と戦ったとされるのが、「染谷川の合戦」である⁷⁾。染谷川を挟んだ国香軍との戦いは劣勢極まり、もはやこれまで、と思ったとき、雲の中に現れた妙見菩薩の神威に助けられ、勝利することができた。彼らは、神の名を村人に尋ね息災寺の花園妙見であると知ったのだった。将門が親族間の誰と連合あるいは敵対したのかは史伝によって異なるが、この千葉妙見縁起⁸⁾は、将門と良文の両者が、共に妙見菩薩の熱心な信者であった事実を物語っている。

妙見への信心極まる余り、平良文は部下の一人を寺僧として息災寺に住ませた後、妙見菩薩を自ら祀るべく盗み出してしまう。その後、菩薩像は良文と共に、武蔵国藤田（現 埼玉県寄居町）——秩父郡内大宮（現 秩父市）——相模国鎌倉郡村岡（現 藤沢市村岡）へと移動、さらに良文の孫・千葉忠常と共に東京湾を渡って上総国上野郷に上陸した。（それぞれの地には関係した寺が残っている。）そして、およそ900年前に下総千葉庄（現 千葉市）の北斗山金剛授寺（現 千葉神社）に鎮座したのだった⁹⁾。鎌倉期以降、千葉氏一族の相馬（現 福島県）から奥州への勢力拡大に伴い、妙見信仰もまた、広まっていった。観光行事としても有名な「相馬野馬追」は、将門以来続く野生馬の放牧に由来する相馬妙見三社の祭礼なのである。



[染谷川に示現した妙見菩薩と将門、良文ら七人の武士]

坂尾山栄福寺所蔵「千葉妙見大縁起絵巻」より

以上、関東地方への妙見信仰の伝搬と変遷に関する文献史的調査結果の概要を述べた。

[補足 1] 信仰の流布拡散はそれを支持する人々の集合離散の結果であり、千葉妙見を確立した桓武平氏のみならず、鎌倉幕府の成立に関与した武蔵七党と呼ばれる武蔵武士団の動向との関連を調査する必要がある、という点も今後留意したい。

[補足 2] 「日本霊異記」に掲載された話のような、失せ物が見つかった等の個人的な御利益だけでは、武士団の支持を得ることは難しい。下松に降臨した妙見の正視できぬほどのまばゆい光や、染谷川に降臨したと伝える妙見神の圧倒的な神威を、彼らは待望したに相違ない。武士階層による支持の高まりに呼応して、関東各地の妙見像の多くには、吉祥天と同一視されたような女神像ではなく、染谷川に示現した剣を持つ童子形の妙見や、剣を頭上に構えて威嚇する能勢型の武神妙見像が流行していった。

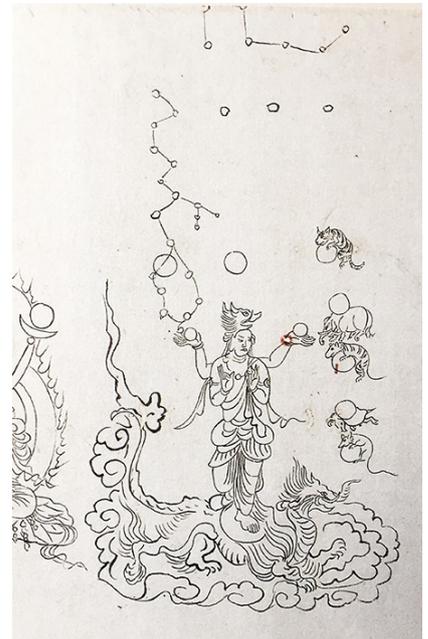
前記の花園妙見との比較のため、関連すると思われるいくつかの像容を以下に掲げる。妙見菩薩像（読売新聞社 蔵）が私の取材撮影である他は、過去の美術展図録から複写した。内部的な報告書なので掲載許可は採っていない。（要 取扱注意）なお、前ページの『千葉妙見大縁起絵巻』からの図版2枚は、和星本制作のため許可取得済である。



[吉祥天立像 京都 浄瑠璃寺]
平安時代の妙見像の多くは、吉祥天像との区別がつかないものが多いという。左手に宝珠を持



[尊星王像 京都 三室戸寺]
龍に乗る四臂の妙見女神像。上の二臂に赤白の日月の珠を掲げ、下の二臂に筆と紙を持つ。園城寺（三井寺）の北辰尊星王像の流れを汲む。

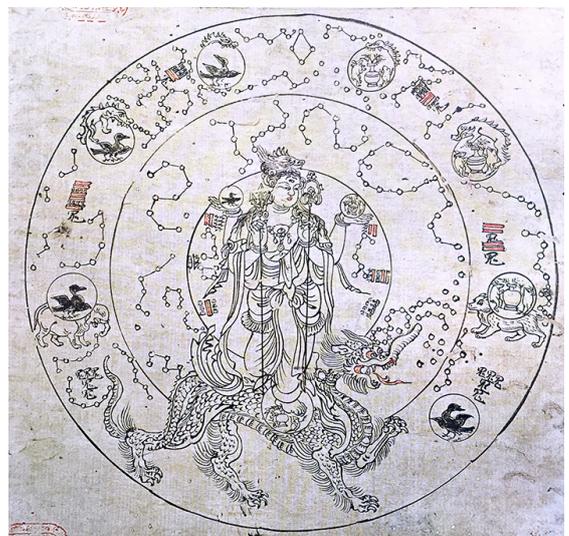


[妙見菩薩図像 京都 醍醐寺]
上部に星宿を描く。北斗と三台星は明らかだが、その下の配列は調査中。



[妙見菩薩像 神奈川 称名寺]
本図の図様は園城寺系と同じで、北辰尊星王の信仰は関東へも流布していたことがわか

[妙見菩薩 「図像抄」]
龍谷大学 ARC 古典籍 ポータルデータベース



[妙見「別尊雜記」京都 仁和寺 鎌倉時代]



[能勢型妙見神像 丹波篠山妙福寺]
 剣を頭上に構え左手は刀印する能勢妙見型武神像



[妙見菩薩倚像 千葉県 妙光寺]
 右手に剣（欠損）を持ち左手は刀印する披髮姿の童子形武神像。



[鷺妙見 東京都浅草 長國寺]
 飛龍に乗る妙見と同じく、鷺に乗った空飛ぶ妙見菩薩は、浅草西の市の期間のみ厨子の扉が開帳される。



[妙見神像]
 東京都/神奈川県 よみうりランド
 右手に剣を持ち左手は刀印する美豆良結髪の子形武神像。元は伊勢国常明寺の本尊だった。妙見菩薩で唯一、国の重要文化財指定。

(4-b) 道教と鎮宅靈符神ちんたくれいふじん

妙見信仰の発祥地がいずれであったとしても、その信仰は中国民族に受容された。しかし、中国には妙見信仰の形跡が無いという説もあり、西域遊牧民が信奉した北極星の神は、道教の主神・真武（太一、北極玄天上帝など様々な別名をもつ）と習合したと思われる。同じ道教の鎮宅靈符神も、北極星の神として日本に伝来したが、神自身よりむしろ、その神が司る七十二靈符の信仰のほうがよく知られている。以下、主として関東地方の鎮宅靈符信仰の足跡を追った調査の結果を述べる。

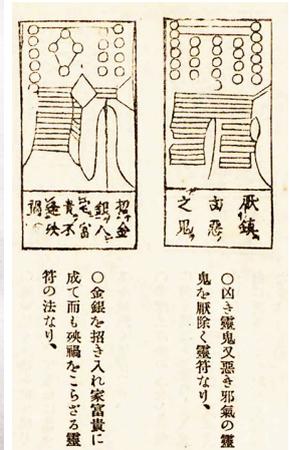
[鎮宅靈符神像 園城寺 室町時代]

黒衣を着た披髮姿の人物が鎮宅靈符神で、画面では分かりにくいですが、右下の蛇を巻きつけた亀に視線を向けている。



鎮宅靈符神は、妙見神と同じく熊本県の八代が初期の伝来地である。この神を祀る靈符神社は、現在八代神社の末社という位置づけの小社だが、鎮宅靈符神を祀る全国の宮の中で“本宮”を称し、全国的にも数少ない「太上神仙鎮宅靈符」の版木が保管されている。

中央に脇侍（抱卦童子と爾卦童子）を従えた靈符神、その上に北斗七星と八卦図（下が北）、最上部に靈符神と脇侍を意味する（と、達磨寺の住職が語っていた）三つの小丸をつないだ図様が配置され、周囲にびっしりと七十二靈符を埋め込んだデザインとなっている。七十二鎮宅靈符の版木は秩父神社にも伝わっていて、授与品の現物は、おそらく版摺りを原図とした縮小コピーかと思われる。



[八代靈符神社の七十二靈符 盛高鍛冶刃物店でいただいたもの] 靈符の上半部分(左)と靈符部分の拡大(右) 靈符を信じるなら、家庭に起こり得るあらゆる災厄から護られ、幸福がもたらされるという。

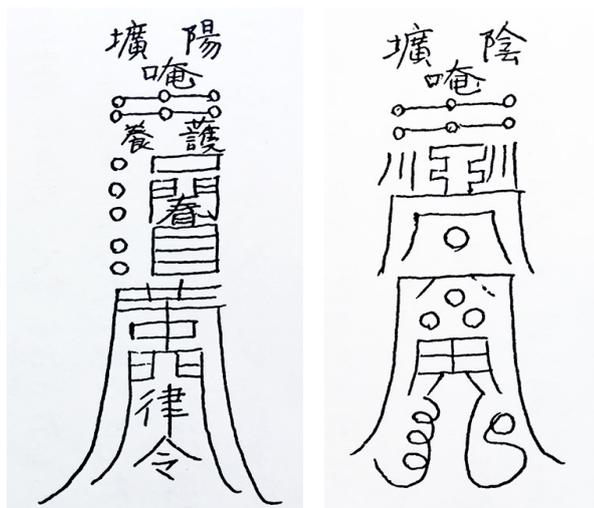
靈符図に見る、塗りつぶさな小丸同士を実線でつないだ図案は、中国星図の特徴であり、四角の中、中心の星座が、輔星付きの北斗七星なのは明白。では、上部に描かれた三つの小丸を結んだ図様が古代中国の星座だとしたら、何座に当たるのだろうか？

その配列から候補を選ぶなら、北斗七星の杓にあたる星ぼしの南側、ゆるやかな山型に並ぶ三星 (μ UMa、 ψ UMa、 χ UMa) が妥当かもしれない。あるいは、北極紫微垣図に見る三公（柄杓の柄の近く、りょうけん座の3星）なども候補として棄てがたいが、いずれの星も信仰の対象となった明確な記録は見当たらない。

そこで私見では、諸葛亮孔明がこの星座の中に現れた客星によって死期を悟ったという三台星～大熊の足にあたる3対6星 (ι 、 κ ； λ 、 μ ； ν 、 ξ) が妥当であろう、と以前から考えていた。



[墓中符 No.10 裏面 沖縄県立博物館] 上から山型3星-横線3星-北斗七星の順に配列。



[墓中符 梁湘潤編著「堪輿辞典」行卯出版社]

近年、沖縄の星信仰を述べた山里純一⁽¹⁰⁾も、祈願の対象となる三つ星はオリオン座三星ではなく北の三台星であるという見解を述べている。山里によると、古い墓内の玄室で発見された墓中符に描かれた三つ星のうち、山型の三星がそれだという。墓中符とは子孫の繁栄と長寿を願う呪符である。写真（前ページ）は沖縄県立博物館収蔵品 No.10 の裏面⁽¹¹⁾（左図）と窪徳忠「沖縄県下の墓中符について」⁽¹²⁾（右図）より掲載させていただいた。山型3星は鎮宅霊符のデザインにも採用されおなじみだが、横一列3星のダブルならば、上記おおぐま座の星列を三台星とみて正解と思う。

さて、霊符信仰の普及に大きく貢献したのが、三禅宗の一つ黄檗宗おうぼくしゅうの活動であった。黄檗宗寺院の閑臥庵（京都）には王城鎮護のため安倍晴明が開眼した鎮宅霊符神像があるという。関東での黄檗宗徒の拠点は達磨寺（群馬県高崎市）で、宗派入り乱れる都に比べて周辺への布教力は大きかったと思われる。近郊の伊香保温泉街は榛名山の北西中腹に位置し、斜面を昇る北風によって幾度となく大火に見舞われていたため、人びとは北辰鎮宅霊符を祀り北方守護を祈念したのだった。伊香保神社入り口付近に北を向いて立つ板碑には、霊符と同じ八卦と星象が刻まれている。



[達磨寺霊符堂 高崎市]



[北辰鎮宅霊符尊板碑 渋川市伊香保町]

[タウトの色紙 達磨寺タウト展示室（達磨寺ホームページより）]（右図）

“感嘆と畏敬の念をもって我が心を満たす二つのもの。それは、頭上に輝ける星と我が内なる道德律”～ カント 『実践理性批判』(1788) の結語

達磨寺はまた、建築家ブルーノ・タウトが妻エリカと共に、1934年から2年あまり滞在した寺としても知られ、山内の瑞雲閣タウト展示室では、彼と同郷の町ケーニヒスベルクに生まれたカントの言葉と共に北斗と三星の図が添えられた自筆色紙を見ることができる。北斗七星のマークは達磨寺の霊符とは異なるが、近隣をよく散歩していたというタウトは、どこかでこのような図が描かれた文書、あるいは石碑を見たのかもしれない。



[北斗瓦]

タウトが暮らした山内の洗心亭の床下にあった輔星付き北斗の鬼瓦を発見。現在ここには無い。



(4-c) 虚空蔵信仰と星宮神社

北極星への畏敬の念が妙見信仰を生んだように、虚空蔵信仰も明星（一般的には金星）への信仰と密接に関連しているのかどうか、はじめに文献史の確認をしておきたい。



[虚空蔵菩薩像 東京国立博物館 蔵]
菩薩から発せられる光線と円光。下部が伊勢朝熊山とすると、金剛證寺本堂の虚空蔵菩薩像か？

実体がなく、想像することが難しい“虚空”という無尽蔵の“場”に関わる菩薩は、対になる地藏に比べてなじみにくい仏である。そこで、“妙見”という概念が北極星と対応されたように、“虚空蔵”は、明星のような眩い天体が存在する場でもあると見做された。

『法華文句』ほっけもんぐは、明星（普光）天子を虚空蔵菩薩の応化おうげ、と説く。虚空蔵菩薩は明星のみならず星ぼしのすべてを支配する存在なので、虚空蔵画像の多くが、菩薩の全身を包む円光を描くこと、その光明の計り知れない眩さを表現しているのである。

二十代の若者、佐伯真魚まお（空海）が阿波の大瀧岳で虚空蔵求聞持法を完遂した際、明星が来影（空海『三教指帰』797）したと語り、室戸岬で真言を唱えたときには、“明星が口に飛び込んだ”と語る。（空海『御遺告』835）苦行完遂時のトランス状態下での幻覚だったのは、言うまでもない。空海の弟子道昌も同様に、嵯峨野の葛井寺（現 法輪寺）で求聞持法完遂のとき虚空蔵菩薩の降臨を感得、関東では日蓮が千葉の清澄寺で求聞持法を行ったと伝えられる。

こうして、虚空蔵菩薩を祀る寺院は全国に広まり、“こくぞうさん”と呼ばれ親しまれたが、民衆が求めた願いはもちろん開運出世、無病延命などの成就だった。ただ、求聞持法による知力と記憶力増強の縁は、近世以降広まったという“十三詣り”の習俗に反映されている。

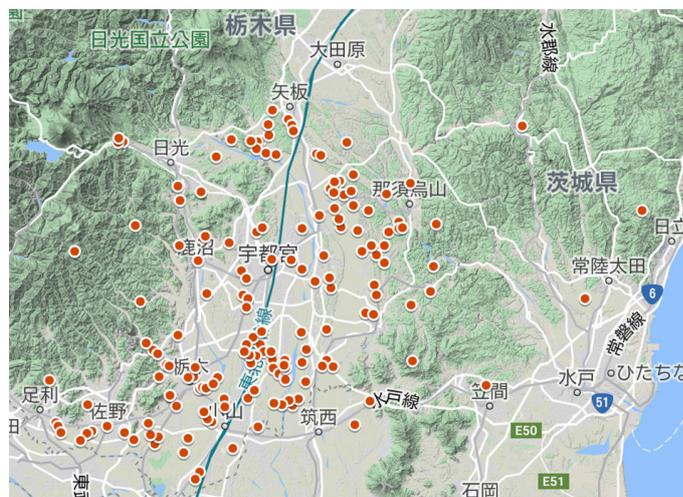
明治元年、政府の神仏分離令を契機に廃仏毀釈運動が全国に広まり、仏教文化遺産の多くが失われた。写真の村松山虚空蔵堂のように、建立の由緒が天皇に関わるような大寺院は大過なく存続することができたが、村々の小さな虚空蔵寺や妙見社（前述のように妙見神も外来の菩薩）は悉く廃寺となってしまった。とりわけ、栃木県の平野部および隣接する茨城県西部、千葉県北部地域の状況は凄まじかった。

しかし、人びとはこれらの寺社を星宮（ほしのみや）として再建し、暮らしを支える精神的な拠りどころとしたのである。祭神は磐裂神・根裂神とする社が多い。（なぜあまり知られていないこの2神が選ばれたのか、その関わりは別に記す。）

右図は『栃木県神社誌』⁽¹³⁾ (2006) に掲載さ



[村松山虚空蔵堂 十三詣り 茨城県東海村]



[栃木県内の星宮神社分布 Google Map 上にプロット]

一部に茨城県と千葉県北部の星宮を含む

れている星宮神社を、記載年以降の市町村廃置分合など行政区画変更を考慮して Google Map 上にプロットしたもので、152社を数えた。「栃木県神社誌」(1964) 他の資料を使った佐野賢治⁽¹⁴⁾による調査数 157社と大差ない結果となったが、これは、星宮神社が昭和の時代を通じて地域の人びとの守り神であり、また人びとが社を守り続けた証しであると言えよう。現在、星宮神社のある地域に、“(虚空蔵菩薩の使者の)ウナギを食べてはいけない”タブーがあったことも、かつて虚空蔵の信仰地だった証拠である。なお、栃木県下星宮神社の例として佐野市および日光市での調査結果の一部を示す。

「物類称呼」越谷吾山(1775)に、“東國にて三ちやうの星と呼”と記された“サンチョウノホシ”はオリオンの三つ星の和名の一つである。佐野市免鳥町の星宮神社、同市村上町の星之宮神社、同市雀宮町の雀宮神社(旧星宮)について、“三社の上に三朝の星が出るころ、麦を蒔くと豊作になる”という古老の話が伝わっている。いずれの地域もウナギが大事にされて、数多く生息していた虚空蔵信仰の土地だった⁽¹⁵⁾。関東地方での麦の播種は11月頃だが、観察者から見たオリオンの出と“三社の上”の位置関係が曖昧なので、この言い伝えの解釈は難しいが、農耕の時節が星の出没と関連づけられているのは確かだ。



[三ちやうの星 栃木県佐野市の星宮三社]

[星宮神社扁額 (佐野市免鳥町)]
免鳥町の星宮神社は、12世紀中葉に創建された天孫星宮慈照大明神という明神社で虚空蔵菩薩を合祀していた。写真扁額の中央に「星宮大神」とあるのがそれである。現在の祭神は、こくぞう=国造りからの連想か、瓊瓊杵尊(相神:磐裂神、根裂神)となっている。



日光観光の入り口となる神橋を渡ってすぐの場所に位置する星の宮磐裂神社は、明星天子の導きによって日光を開山したと伝えられる勝道上人が建てた小社である。また、金谷ホテルの門を渡ってすぐの一角に「星の宿」と呼ぶ石造物がある。日光修験の行者たちが冬峰修行の最終行場とした場所であり、不動明王像と護摩壇の奥に建つ小祠内には、明星天子(虚空蔵菩薩)が祀られているのを確認することができた。ただ、調査時には首が無い幾体かの仏像を目撃、廃仏毀釈の生々しい残滓か?とってしまうほどの光景だが、その真偽は不明。世界遺産を謳う名勝群との対比を思うと、胸が詰まる思いであった。



[星の宮 磐裂神社(日光市上鉢石町)とその扁額]



[星の宿 小祠と不動明王像]

(4-d) 日本の星神～天津甕星（香香背男）

隣国から伝来した星の属性を持つ神、妙見菩薩と虚空蔵菩薩は共に仏教神であり、鎮宅霊符尊に到っては道教の最高神だった。これに対して、わが国固有の星神・天津甕星あまつみかぼし（香香背男かがせお）は各地の国つ神の中の一柱である。高天原の武甕槌命たけみかづちのみことと経津主命ふつぬしのみことら天つ神連合軍に対し巨石と化して抵抗したその舞台は、現在の茨城県日立市石名坂。強国出雲すら平定した武神をものもしなかつた甕星香香背男は、なぜか土地の倭文(織物)神・武葉槌命に敗れ砕け散ったという謎多い神話が残されている⁽¹⁶⁾。香香背男の魂を封じた宿魂石⁽¹⁷⁾の上に建つ大甕神社の由緒などに関しては、すでに調査済だが本報告では省略し、ここでは天つ神連合の武甕槌と経津主について述べる。



[宿魂石と伝えられる岩山の上に建つ大甕神社本殿]

鹿島神宮（祭神 武甕槌大神）と香取神宮（祭神 経津主大神）は凡そ 13km 程隔てる立地で、古代には両者の間は海だった。古来より神宮を名乗る社はこの 2 社と伊勢神宮しかない。これほどの大社を隣接して建てるほどに東国の重要拠点だったと考えられ、本居宣長が『古事記伝』で記したように両社は同じ神を祀っていたのかもしれない。香取神宮では毎年 1 月 16 日に甕星香香背男の霊を鎮める星鎮祭ほしづめさいが行われ、鹿島神宮でも明治の頃まで北星祭⁽¹⁸⁾という星に御燈を掲げる行事があったとの記録が確認できる。



[星鎮祭 香取神宮] 大星的に向けて矢を射った後、星塚に竹串を刺して星神を鎮める

[要石かなめいし 鹿島神宮] 要石は香取神宮にもある。近世以降、地震を起こす鯨を抑える石とされているが、星鎮めの石だったかもしれない。

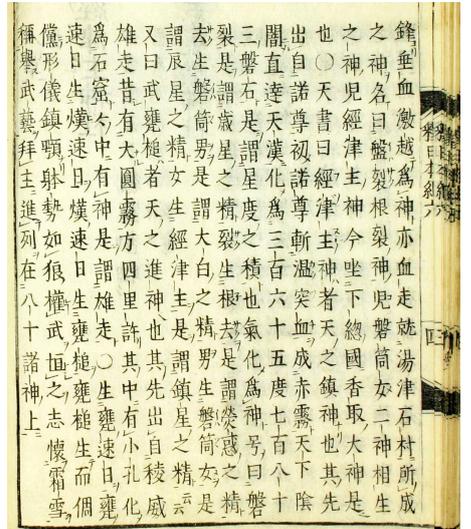
じつは、武甕槌と経津主の誕生に関わる神話こそが日本の星神誕生の物語なのである。『日本書紀』の記述に沿う星神誕生の順序は以下の通り。

- (ア) 伊弉冉尊いざなみのみことは、火神 軻遇突智かぐつちを産んだ際の火傷で死ぬ。伊弉諾尊いざなぎのみことは怒り、十握剣とつかのつるぎで軻遇突智を斬った。
- (イ) 軻遇突智を斬った刀から滴る血が天の八十河を赤く染め、河底に無数の石（五百箇磐石いおついわむらが生じた。
- (ウ) そこに化成した神が磐裂いわさく神と根裂ねさく神である。

(エ) この二神から産まれた神が、磐筒男いわつつのおと磐筒女いわつつのめ。
 (オ) 磐筒男・磐筒女の二神から経津主命が誕生した。（『積日本紀』）
 『古事記』に経津主は登場しないが、他の神々の名称はほぼ同じである。
 (カ) 伊弉諾の剣の刃からしたたり落ちる血が天安河原の石と
 なった。その石が経津主の祖先となる。

(キ) 剣の鐔ツバから滴った血が天安河に注ぎ、甕速日みかはやひ神、燖速日ひのはやひ神が生まれた。次いで生まれた武甕槌命は甕速日の子、あるいは弟とされる。

剣の鋒先から滴った血から磐裂、次いで根裂の神、さらに磐筒男と磐筒女の命が為り出でた、との記載もある。書伝によって出生した神々の名前や順序が異なっているのだが、キーとなる神は火神軻遇突智であり、体からほとぼした血によって天の河の石群＝星ぼしの生成が説明される。軻遇突智を斬った剣は雷光を象徴し、武甕槌と経津主の両剣神もまた香香背男と同じ星の属性をもつ神だったのであろう。このような記紀の記述を受けて、鎌倉時代中期に書かれた注釈書『積日本紀』（占部兼方 著）には、八世紀の『天書』（藤原浜足）を引用し以下のような内容が書かれている。



[積日本紀（占部兼方）早稲田大学 所蔵]

- (ア) 伊弉諾が軻遇突智を斬った血赤霧が天漢に達し、化して783個の磐石となった。
- (イ) 石が気化して〈磐裂〉という神となる。〈歳星〉＝木星の精である。
- (ウ) 磐裂は〈根裂〉を生む。是れを〈熒惑けいこく〉＝火星の精という。
- (エ) 磐筒男を生む。〈太白〉＝金星の精という。
- (オ) 磐筒男は磐筒女を生む。〈辰星〉＝彗星の精という。
- (カ) 磐筒女が経津主を生む。〈鎮星〉＝土星の精。

大陸文化が移入され、古代中国の惑星名と記紀神話の神の対応が図られたのである。もっとも、江戸後期の国学者平田篤胤は、“漢籍に、星ハ石也とあるのに合わせてつくった妄説で抛り所にすべきでない”、と切り捨てているが、甕星香香背男に限っては、“星”の語が反逆・反体制の象徴になっているからだろうか、力が入った篤胤の言説が目を惹く。

「…神とも命とも言わずに卑しめているが、甕は甕速日神と同じで、厳いかく大なるを云う言葉で、諸々の星を統括する優れて大なる星は金星しかない。」（『古史傳』⁽¹⁹⁾二十四・筆者意訳）
 なお、前節の虚空蔵信仰の考察でも明星にふれたのだが、香香背男を祭神とする明星神社も存在する。（写真右下：神奈川県二宮町の明星あかほし神社：祭神 天香香背男命など）



明星
第九号
(明治三十二年七月十五日発行)



[文芸誌『明星』の表紙と鉄幹自身による檄文的記事]

[明星神社 神奈川県二宮町]

偉大な反逆神を金星に喩えたのは、もちろん日本に限らずキリスト教圏の国々も同じだった。

図はミルトン『失樂園』（1667）の一幕を描いたドレによる挿画で、大天使ミカエルの電撃攻撃によってルシファーは敗れ、地獄へと墜落する情景の一コマである。ここから、墮天使ルシファーによる神への反逆の物語が始まるのだが、本論ではミカエルの電撃と武甕槌の雷剣、光り輝く神であったルシファーと金星（明星）との類似性だけ指摘しておきたい。

いつの世でも人は、大なり小なり反逆の想念を抱くものであり、たとえば明治期の歌人・与謝野鉄幹による『明星』創刊と、その誌面での過激な論調（前頁の写真参照）も、文芸という限られた世界での一例と言えるだろう。



[John Milton's "Paradise Lost"]

by Paul Gustave Doré 1866

(4-e) 星と水と石～星辰信仰の背景

伊弉諾の剣に付着した軻遇突智の血から化成した武甕槌に続いて、最後に閻罔象くらみつは 閻竈くらかみの二柱の水神の誕生が語られる。現代に生きる私たちには、とりわけ意識されることのない水と石の関係とは言え、古代の伝承は今も残っているのである。

岩手の山里に伝わる天女譚は、「百姓の惣助が釣りに出かけると、天女が、脱いだ着物を池の“巫女石”に掛けて水浴をしていたのを見て、その衣があまりに美しかったため盗んでしまった…」⁽²⁰⁾と語る。その後の展開は多くの天人女房譚と同じだが、山地では松の木に掛けるのではなく石に置くことに変わっている。著者の石上 堅は同様な数例の話を紹介して「水と石と天降りの者との間には、切れぬ縁が遙かな世からあった。」と記した。この場合、天上から山地に降臨する神の依り代としての石の信仰があった、と考えられるだろう。あるいは、石そのものが既に天上から降臨した“神宿る石”であったかもしれない。天上の石群が夜空に輝く星ぼしなのだという古代人の認識については前節で語った通りである。

埼玉県桶川市の近郊に興願寺という真言宗の寺院がある。開山僧の隆尊が虚空蔵求聞持法を修行した際に明星が井戸に降臨したため、その井戸を「明星井」と名づけたと伝えられる⁽²¹⁾が、一般には、天女の糸が井戸に向かって垂れていた、あるいは井戸から明星が飛び出したという、情景が浮かびやすい話が知られている。明星に関連づけられた井戸は著名な井だけに限っても10井以上あり、たとえば、井の中に明星石があり寺宝にした（鎌倉 星月夜の井）など、それぞれが微妙に異なる由緒を謳っているのが興味深い。しかし、近年の土地開発によって所在が不明となった井戸が多いのもまた事実であり、現存する明星井に関しては、実態調査を行って現状を把握し歴史的資産として保存できるような行政側の理解と支援が望まれる。



[黒谷明星水 金戒光明寺 京都市]



[明星井 興願寺（明星院）桶川市]



[嵯峨落星井 法輪寺 京都市]



[星の井 円満院星井寺 鎌倉市]



[星の井戸 清澄寺 鴨川市]



[星の井戸 星谷寺 座間市]

星の井戸がある上記の多くが虚空蔵信仰の寺であるのは、言うまでもなく求聞持法による明星来影の由縁に基づくとみなすのが妥当である。しかし、求聞持法が山嶽地帯での修行を必要とすることから、虚空蔵信仰は山嶽信仰と結びつき、上記写真の安房清澄山をはじめ、能登の石動山、伊勢の朝熊山など地域一帯の分水嶺となる山頂付近に信仰の拠点があったとする児玉充⁽²²⁾の主張が興味深い。氏によれば、虚空蔵菩薩は農民が信仰する山の神と深く関連していたとして、明星伝説に関しても、虚空蔵信仰に先行して水を司る神としての星の信仰があったと推察している。氏の仮説の論拠は、播種や田植えなどの農耕の時節を知る手段として、農民がスバルや三ツ星など星の出没に注目していたことは明らかで、また同時に、星はそれらの農事に不可欠な水を司る神として信仰されたという論旨である。雨期の到来を星の出没や南中で知る例は世界的にも知られているし、神話論に依存せず、生活者の営みから星の信仰を考察する試みは注目に値する。だが、ローカルな本事例については、信仰の山として知られる石動山（能登）や朝熊山（伊勢）などの遺跡や寺院の調査は行われているものの、それぞれの山間部に住む周辺住民の星との関わりなどの調査がほとんど行われていない現状では、結論はまだまだ先と言わざるを得ないだろう。

石動山と朝熊山に関しては次年度以降の調査を検討中だが、次に採り上げるテーマとの関連で石動山の事例のみ簡単に触れる。

能登石動山（せきどうさん）は、古くは「いするぎ山」または「ゆするぎ山」と呼ばれ、信仰の山として栄えた。神仏習合、本地垂迹思想を背景とした伊須流岐比古（いするぎひこ）神社の宗徒たちの活動は能登半島のみならず本州日本海側の各地に広がり、最盛時には300社を越える分霊社が存在した。石動山の名は、「天より星落ちて石と成、天漢石と号す。…この石ゆるぎて山震動してあれしに依り石動山と云えり」（『能登名跡志』1931）との伝承に由来するが、細かな点では、『石動山古縁起』（1623）と林羅山の『石動山新縁起』（1654）、および『石川県鹿島郡誌』（1914）が「落ちた星は三つに割れて三方に落ち、その一つを「動字石」とする」と書くが、これはいわゆる三光（日月星）信仰になぞらえたものであろう。また林羅山は、天漢石を“天の川を流れ下って地上にやって来た石”だと捉えていたと思われ、そうだとすれば動字石は、落星伝説とは違うカテゴリー～地上の大河と天の川がつながっているという、中国での張騫伝説⁽²³⁾にみる世界観も考慮する必要があるかもしれないが、七夕伝承に関連するこの件に関しては、機会があれば別の論考としたい。

動字石（天漢石）の正体は未調査だが、境内のシンボルとして鎮座する動字石は隕石ではなく、文献⁽²⁴⁾によれば安山岩の巨石とのことである。

三光（日月星）になぞらえたかどうかは別として、星が三つに分裂する落星伝説は、大阪府交野市や岡山県井原市美星町の例などが知られている。自然現象として可能性ゼロではなく、2体に分裂したと思われる流星は私も目撃した経験があるが、正三角形的な分裂で3体が発光し続ける確率は極めて低い。信仰心を煽るためと言っては語弊あるものの、隕石が確認されていない状況下ではほぼ創作（内情は裏話とし聞いている）と思ってよい。ただし、美星落星伝説の落下地に立てられた三社をはじめ、四国、中国地方に三躰（三台、三体）妙見と呼ばれる妙見社が多い点は注目しなければならず、その解明を目指したトンデモではない宗教学的な研究は寡聞にして知らない。単に近郊の三山に社宝が祀られたただけなのか、あるいはやはり、天文現象と関連するのだろうか？

また、神社に伝わる社宝やご神体が隕石だった例はあるので、天文学研究者と寺社関係者とが互いに理解しあった協働作業が必要であろう。

美星や交野の件は、本研究報告とは別にそれぞれの地で天文教育普及を営んでいる関係者との意見交換によって得た個人的感想に過ぎないが、天文文化（もちろん、サイエンスとしての天文学に限定せず、人びとの精神的・物理的環境としての星や宇宙との関わりを意味する）の普及発展において考慮すべき重要な点を孕んでいると考える。交野や美星での天文学的事実を無視した過剰な町おこしは、一時的に観光客が増えるとしても文化事業として決して賛同できるものではない、と主張したい。

古代中国で発生した陰陽五行説によると、木・火・土・金・水の五行相生そうじょうの一つに、〈金生水〉～金属は水を生む、という状態がある。“金”は鉄と考えてよく、夜間などに気温が下がると鉄板や鉄器の表面に水が凝結して水滴ができる様子を見て生まれた言葉だと思われる。（木生火、火生土、…どれもが、もっともらしい理由を想定できるだろう。）

『漢書・天文志』や『史記・天官書』^{(25)・(26)}は次のように記している。（漢は、天漢、銀漢、雲漢、天河などの別名をもつ天の川のこと。）

「…星者金之散氣…漢者亦金ノ散氣、其ノ本ヲ水ト曰フ。漢、星多ケレバ、水多シ。」

“気”と呼ぶ観念の理解は難しいが、ここでは、星と金属（石）と水とが密接な関係を持つとだけ理解しておきたい。

本節では、はじめに〈金属（石）と水〉の関連を示す神話と民話を指摘し、続いて〈星と水〉の関連を示す明星井を紹介した。〈金属（石）と水〉の関連は五行説でも謳われていることを確認し、〈星と金属（石）〉の関連が古代中国の天文思想書に“星者金之散気”と記され、隕石落下という自然現象の目撃経験によって裏付けられたことを指摘した。引き続き〈星と金属〉に関する調査、考察の一部を報告する。

(4-d) 鉱山と星辰信仰

南北朝の争乱を間近にひかえた鎌倉後期、周防（山口県東南部）の大名だった大内弘幸は不思議な夢を見た。山口の大内家と言えは妙見信仰起源譚（p.5）の当事者であり、信奉する北辰妙見尊星王が夢枕に立ち、「石見国仙の山に宝有り。汝、銀をとりて外敵を排せよ。」と告げたと言う。じっさい石見へ出かけて仙の山を見ると、山肌が眩いばかりの白銀色に輝いていた…こうして大内氏による石見銀山の発見と経営、その後の銀山争奪の歴史が始まったのである。以上はあくまで伝説に過ぎず実際の発見者は分からないが、大内氏の統治下に採鉱集団がいたことは間違いない。大内氏自身も元の姓は多々良氏、言うまでもなく製鉄民“たたら”だった。

日本の山岳地帯には数多くの鉱山がある。もちろん、石見銀山のように統治者の伝承として記録された例は稀であり、鉱山の多くは山嶽修験者、名も無い山師たちによって発見されたに違いない。

鉱山と信仰、とりわけ妙見と虚空蔵という星辰信仰との関係に初めて注目し研究したのは、医師の若尾五雄^{(27)・(28)}だった。氏の著作が取り上げた信仰には、妙見と虚空蔵の他、先人の松田壽男による紀州の丹生津媛信仰（水銀）、同じ中央構造線に沿った鉱山がある三河の東栄町と当地の花祭との関連など興味深い内容が含まれている。（花祭には星辰信仰の要素もある。）

氏によれば、妙見であれ虚空蔵であれ、星神と鉱山とは密接な関係があるということである。空海が求聞持法の修行をした最御崎寺には金鉱、福岡県八女郡旧星野村妙見城は、“星”と妙見と金鉱。大阪府 能勢妙見は金銀銅の産地で豊臣秀吉の“ドル箱”、日蓮宗の聖地七面山（山梨）は甲州金の一大産地で、同じく武田信玄の“ドル箱”だった、などの独自の視点が興味をそそる。何とも現世御利益を謳う星の神々であることか。

なお、若尾の著書に挙げられた社寺のリストには、過去に訪ねた所はあるものの、鉱産地帯という視点で見えていなかったため、本報告では文献調査が主体となっている。

ただ、今回の科研名古屋会儀において、若尾本にも記載ある本節に関連した寺院を一山、実地調査したのでその結果を簡単に記しておく。

- [名称] 金生山明星輪寺 [通称] 赤坂の“こくぞうさん”
- [住所] 岐阜県大垣市赤坂町 4610 番地
- [本尊] 虚空蔵菩薩 (本殿の岩室に安置 4年に一度ご開帳)
- [創立] 朱鳥元年(686) 役小角

金生山の頂上、石灰岩のカルスト地形の中に建つ。(奇岩立ち並ぶ裏手の岩巢公園は諸事情で行けず残念)虚空蔵菩薩の十三詣は、当地方では伊勢朝熊山の金剛證寺、京都嵐山法輪寺と並び知られている。住職によると“金生山”という山号の“金”は鉄を意味し、この地に産出する鉄鉱石(赤鉄鉱)に因んで名付けられたとのこと。地形として山の名称が決められたのはずっと後のことである。授与されるお守り袋の中には当地で採れた赤鉄鉱の小片が収められている。産出鉱物としては、赤鉄鉱の他、過去には金、銀、銅が採れたらしいが、現在は石灰岩の採掘のみを数社の石灰工業会社が行っている。

風化した酸化鉄が混じった土のため、遠方から望む金生山の山肌は赤い。ホームページのリンクには当地で撮影した天体写真もあり、社務所の玄関に望遠鏡が置かれていたので、星好きの関係者がいるのだろうか?だとすれば、さほど多くはない“明星”の寺院名に因んでその由来と関連する天体観察会などを、眺望が素晴らしい山頂の境内で開催したら良いのに、と思った次第。

金生山の中腹に市立化石館があり、当地で採集された赤鉄鉱の大きな標本、ウミユリやフズリナの化石などが展示されていた。



[金生山全景 by Google Earth]

頂上の+印が明星輪寺。麓から頂上まで歩くのはキツイが、昨今の健康ブームで、毎日登ってくるお年寄も多いとか。長年の採掘によって元々の山容は面影すらない。



[明星輪寺へ向かう山道から]
山肌の赤色が目立つ



[明星輪寺のお守り]

赤鉄鉱の小片を入れたのは、現住職のアイデア



[明星輪寺本堂]

5. 星、あるいは光の心理学

既に述べたように、日本神話での星神誕生のきっかけは、イザナギが十握剣で火神 カグツチを斬ったことに始まった。フツヌシとタケミカヅチはこのとき剣に付着した血に化成した神々であった。両神は出雲国の稲佐の浜で大国主に国譲りを迫り、砂浜に逆さに突き立てた剣先に降臨した。その剣も同じ十握の剣「フツノミタマ布都御魂（節霊）」。剣自体が神の属性をもち、石上神宮の主祭神としても知られている。

前回、国立天文台で行われた会議において保立氏は、石上神宮の七支刀の写真を逆さに提示し、金象嵌線が入っている点からも稲妻を形容すると述べた。（氏は至上神タカミムスヒの持物としているが…）

たまたま先月、東京国立博物館での『出雲と大和』展で実物を見る機会があり、表裏に金象嵌線を確認した。稲妻説には私も賛同したい、ただしタケミカヅチの霊剣フツノミタマとして。七支に分かれている点は北斗信仰の影響であろう。

フツノミタマの“フツ”の意味を巡っては諸説あり、剣の切れ味を示す“フツ”や“プツリ”等の刀剣を形容する語だとする説が支持されていたのに対して、三品彰英は光あるいは神霊の降臨に関係するのではないかと指摘した。韓国語の pur (火)、purk (赤、赫)、park (明) をフツやフルの同系語として想起せざるを得ない、と述べたのである。さらに purk は、天や太陽に対する宗教的観想を伴う語でもある、と指摘している。（三品彰英『フツノミタマ考』1932）

また、タケミカヅチに関して湯浅泰雄は、「建御雷」の“雷”と「武甕槌」の“甕”に注目し、まず雷光が剣を、甕が火を媒介とした土器“竈”に関連することに注目した。（湯浅泰雄『神々の誕生』1972）

このような属性をもったフツヌシとタケミカヅチの二神が星神であるとするなら、両神がもつ剣から発せられる光と星の光には共通点があるはずである。

古代日本で星を意味する語は、posi (保之)、tutu、tudu (豆豆) であり、朝鮮語では bier (ピョル) と言う。私の調査は現状不十分で、火も星も短い言葉であるため発音が似ているとは確信できず、残念ながら三品の説を確証するには未だ程遠いようで、言語学的検討は今後の課題としたい。

では、視覚認知的に見た火と星の光の特徴はどうだろうか？

火が有する様々な特徴の中で、星と共通するものを挙げるとすれば、“迅速な光の揺らぎ”だと言えよう。G・バシュラールは、火の特徴についてこう綴っている。『…マックス・ミュラーの言に従えば、「人間をとらえたのは、とりわけ火の素早い運動であった」からである。だからこそそれは「素早いもの、敏速なもの、アグニ、火」…と呼ばれたのである。』⁽²⁹⁾ (インドの火神アグニは、タケミカヅチと同様に雷光や竈の神でもある。)

天孫が支配しようとして企てた葦原中国もまた同様に、螢火の光かかやく神、蠅声さばへなす邪しき神で溢れていたのだ。じっさい、大気による星の光のシンチレーションは、明るさと色彩の変化のどちらも共に、現代人の想像をはるかに超えるものだったに違いない。

とりわけ、星が上った直後、あるいは沈む間際の地平高度が低い時ほど、シンチレーションが大きく、星は煌めく。この原因は大気層の擾乱にある。（古代においても天然エアロゾルによる減光はあるものの、そのシンチレーション効果は無視できる。）

同じ天体であっても、高度が違えば視覚的印象が異なるため、大気による屈折効果も手伝って、揺らめき明滅する星を見て“怖れ”に似た特別な感情を抱いた⁽³⁰⁾としても不思議ではないだろう。

このような夜の星に対する感覚は歴史時代に入っても引き継がれたと思われ、大陸から中国の暦法や天文学が入った7世紀以降も、朝廷で観測を仕事とする者たち以外、民衆が星に慣れ親しんでいた痕跡はない。8世紀初頭に成立した『播磨国風土記』に、天皇が星の出る頃まで猪や鹿を殺し続けた狩場の山を「星肆ほしくら」と名づけた、という記事が残されているのが、妙に印象深い。



[明星輪寺本殿内部]

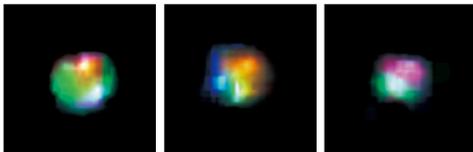
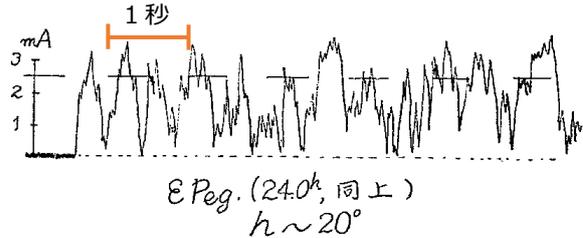
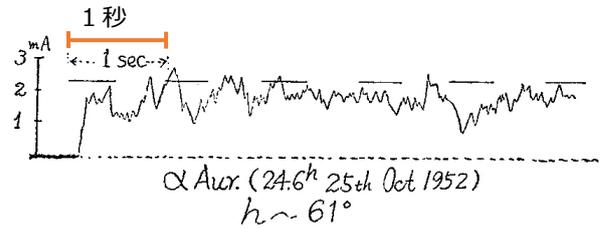
奥の石室扉内に本尊の虚空蔵菩薩が鎮座。4年毎に御開帳。

よく知られているように、星が文芸の対象として織り込まれたのは、清少納言から建礼門院右京大夫にいたる平安中期以降のことであつたし、絵画として星空が描かれるには江戸時代の北斎まで待つことになるのである。(完)

[星の高度によるシンチレーションの違い]⁽³¹⁾

- (上) ぎょしゃ座 α 星(カペラ) 地平高度 61°
- (下) ペガサス座 ε 星 地平高度 20°

高度が高いときは光度変動が小さく、変動周期が短い。
高度が低いと、光度変動幅が大きくゼロになる瞬間もある。周期は緩やか。



[カノープスのシンチレーション]⁽³⁰⁾

撮影：山本 誠 氏
(動画添付)

[脚注]

- 註(1) 中西用康『妙見信仰の史的考察』p.17 相模書房 2008
- 註(2) 小泉 道 校注『日本靈異記』新潮社 1984
- 註(3) 林 温『日本の美術 No.377 妙見菩薩と星曼荼羅』至文堂 1997
- *同書は『日本靈異記』上巻の妙見に因む話を考慮していないため、奈良時代末と記載 (p.17)
- 註(4) 熊本地名研究会『八代学への招待 '90』p.78 全国地名シンポジウム八代大会 1991
- 註(5) 近藤清石『大内氏實録』巻第一の冒頭 1885 NDL デジタルコレクション
- 註(6) 千葉紀胤『千葉妙見序説』房総文化 第13号 p.3 房総文化研究所 1975
- 註(7) 野馬追の里原町市立博物館企画展図録 第21集 千葉市立郷土博物館特別展図録『相馬地方の妙見信仰 -千葉氏から相馬氏へ-』前記博物館 編集発行 2003
- 註(8) 坂尾山栄福寺所蔵『千葉妙見大縁起絵巻』千葉市立郷土博物館 1995
- 註(9) 『千學集抄』原本 金剛授寺(現 千葉神社)所蔵 房総叢書刊行会 第3巻 1941 『千葉實録』、『将門記』等を含む『房総叢書』は、NDL デジタルコレクションから入手可
- 註(10) 山里純一『沖縄における星の信仰』沖縄民俗研究 第34号 p.8 沖縄民俗学会 2016|
- 註(11) 萩尾俊章『沖縄県立博物館収蔵品にみる墓誌と墓中符について』沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要 No.2, pp.37-45, 2009
- 註(12) 窪徳忠編『沖縄の風水』p.183 平川出版社 1990「沖縄県下の墓中符について」は編者書き

下ろし

註(13) 栃木県神社庁『栃木県神社誌 神乃森 人の道』栃木県神社庁 2006

註(14) 佐野賢治『虚空蔵菩薩信仰の研究』p.30 吉川弘文館 1996

註(15) 佐野市史編纂委員会『佐野市史 民俗編』 p.607 佐野市 1975

註(16) 『日本書紀』神代下第九段 香香背男を太白星（金星）神だとした初見は、平田篤胤「古史傳」。後に野尻抱影も金星（明けの明星）に相違ない、と述べ、近年では勝俣隆「天津甕星の解釈について」長崎大学教育学部研究報告 1992 がある。

註(17) 常陽藝文センター『常陽藝文』pp.1-11, 2004/5 月号

註(18) 風俗画報増刊 明治三十九年『鹿島名所圖會』国書刊行会 1978

註(19) 平田篤胤『平田篤胤全集 古史三』第三卷 内外書籍 1934

註(20) 石上 堅『石の伝説』p.164 雪華社 1963

註(22) 児玉 充「山嶽信仰における虚空蔵菩薩」印度學佛教學研究, pp.150-151 1974-1975, 23 卷, 2号

註(23) 中国前漢時代の政治家。武帝の命によって西域部族との交渉のため旅立つ。黄河の水源を極めるなど、西域の情報や事物を漢にもたらした功績は大きい。黄河を筏に乗って遡ると天の河に達し、そこで織女に会い、機織り台を支える石（支機石）を持ち帰ったという「乗槎伝説」でも知られている。

註(24) 櫻井甚一, 清水宜英, 濱岡賢太郎, 田川捷一『能登石動山』p.72 北国出版社 1973

註(25) 中國哲學書電子化計劃『史記・天官書』(84&85) <https://ctext.org/shiji/tian-guan-shu/zh>

註(26) 同上『漢書・天文志』(72) <https://ctext.org/han-shu/tian-wen-zhi/zh>

註(27) 若尾五雄『黄金と百足 鉾山民俗学への道』人文書院 1994

註(28) 同上「鉾山と信仰」佐野賢治 編 民衆宗教史叢書 第 24 卷『虚空蔵信仰』雄山閣 所収 1991

註(29) ガストン・バシュラール『火の精神分析』p.53 前田耕作 訳 せりか書房 1972

註(30) 本稿は星の信仰についての論考に限ったが、日月神では多くの例を上げることができる。“ご来迎”の慣習は身近にあり、年初に限らず毎朝太陽に向かって手を合わせる老人の姿が、わたしの記憶に焼き付いている。月待信仰も二十三夜や二十六夜を筆頭に、本来は月の出の瞬間を待つオコナイ（行い）であったし、熊野三体月のような特別な月を待つ例も知られている。

また、ユングが東アフリカ・エルゴニ族と暮らした調査では、東から昇る太陽を“神”と崇め、中天高く昇った太陽を見て、何をバカなことを聞くのだ、と当惑し、“あれは神ではない”と酋長が説明した、と記しているのも興味深い。

註(31) 片山 昭, 豊田耕一「星のシンチレーションと上層大気の乱流」日本気象学会創立 75 周年記念論文集 1957

以上、私たち日本人の星の信仰とその思想に関する研究の端緒として、今後探求すべき点を概観した。じつのところ信仰の分野は門外漢であり、経文や碑文を読みこなす能力も無い。また、宗教美術に関しての素養が無いため、重要な図像を見逃しているのかもしれない。宗教に限らず記紀神話全般の解釈に関しても同様に不甲斐ないが、天文学との連携という視点に限って見渡すと、本稿で引用した国文学、哲学、歴史学系の諸先生による記述を再検討する役目は果たせるのかもしれない、と思う。心理学的解釈については本稿の流れにそぐわず、検討不十分だったことお詫びいたします。（茨木）